

第25回全日本中学校道徳教育研究大会徳島大会特別公開授業・道徳学習指導案

徳島県板野郡板野町立板野中学校

3年B組 男子19名 女子18名 計37名

授業者 森 口 健 司

1 主 題 名 生 き る 絆

2 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

人間としての生き方とは何か。生きることを考えることが極めて少ない現代社会の中であって、目の前の幸福を追い求め、安易に暮らしていこうとする世俗的な意味での幸福な生き方を求める生徒や大人が多い。しかもなお、人の一生は順風満帆な人生ばかりとは限らない。逆境にさらされたり、不運に遭遇したり、また裏切りや誘惑によって自己の正しさを貫けず、自分の能力の限界を感じ、生きる自信を失うこともある。

こうした中で、人間の弱さや醜さを自覚し、それをばねにして人間の崇高な面である強さや気高さを目指し、だれに対しても人間として温かいまなざしを向けるとともに、相手に対する思いやりや感謝や信頼に支えられた、人を人としていとおしむ心を深め合っていくところに、生きる喜びや幸福があると考え。

思いやりとは、単なる同情ではない。相手の立場に身をおき、自己のいたらなさに思いが及んではじめて相手を思いやる心が生じる。この深い自己省察による思いやりや感謝や信頼は、人間として生きる強い心の絆となり、相互に誠実に生きようとするより処になっていく。

主題名「生きる絆」も、人間として生きる絆が、思いやりを土台とし、深い信頼の中から培われていることを理解させたいという切なる願いを込めて設定したものである。

(2) 生徒の実態

社会の風潮も手伝って利己的・自己中心的になりやすく、目先の損得に目を奪われがちな日常の生徒の言動が危惧される。自分が優位に立っていたり、自分に都合のよい状況下では相手を思いやり支え合うことの大切さを理解し実践もしていると思われる。ところが、不利な立場や自分が損失を被る状況下ではどうだろうか。これまでに培った人間関係をよりどころとして自分を偽ることなく、相手を思いやり信じていることができるだろうか。生徒一人一人の人生において、周囲の人々と信じ合って生きる喜びを求めさせたい。そして、その基となる信頼に足る友人関係を積極的に築いていこうとする意欲や態度を養ってもらいたいと願う。

本学級の生徒は、人間としての生き方を考える道徳の授業を通して、一人一人が信頼という固い絆で結ばれつつある。1学期後半、本校で実施された同和教育研究大会での道徳の授業において、A子が「私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けられることができると思うようになってきました。今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。まだ二人しか本当の友だちはいないけど、これからはもっとたくさんの本当の仲間を増やしていきたいです。」と語る。

そのA子を支えるかのようにB子が「私もAさんにそのことを打ち明けてもらったんだけど、自分の一番苦しい部分を打ち明けてくれたんだから、私も心を開いて頑張っていけないかと思うようになってきました。今、まだ二人にしか言えなかったかもしれないけど、もっとクラスの

中の人たちがA子さんの気持ちを受けとめて、みんな今の時間を大切にしてほしいと思います。」と語る。

A子やB子の訴えに励まされてC子が「今、3年生でも、何人かの人が、自分が部落出身ということ全体学習なんかで言ったんだけど、今、A子さんが二人だけと言ったけど、ここにいる3Bのみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたと思いたいです。私も部落に生まれたんだけど、恥ずかしいと思ったこと一度も……なかったけど……ほなけど言うて差別されたいやじゃと思うてずっと言えなかったけど、このクラスの子だったら、信じることができるからこのことが言える。」と語る。

そのC子を支えるかのように、D子が「A子さんとC子さんが言ってくれたけど、これから今日打ち明けたことを後悔するようだったら、私やはいったい今まで何をしてきたんかと思ってくれていいと思います。私も部落ということ言うた子を変な目で見ようなんて一つも思うてないし、見たらごっつい自分があほらしいなってくると思います。それで、この前読んだ本で心に残っていることなんだけど、一応世間で言う『親友』とは、親しい友と書いて何でも話し合える友だちということだけど、本当の親友とは、心の友と書いて自分の恥ずかしいところでも、何から何まで端から端まで話し合える友だちを心友というそうです。私もそんな心友をたくさんつくりたいです。」と語る。この授業は共感と連帯の絆に結ばれることの喜びや幸せを生徒一人一人がつかんでいく学習となった。

この授業の翌日の生活記録にE子が「今日の授業、涙を流して自分が部落出身だと語ってくれた友だちがいた。私は友だちが言ったとき、手を挙げるつもりでいたのに、何か友だちの存在が大き過ぎて、その友だちの言葉が思い切り、私の心の中の差別心を刺したような気がした。B子さんやF子さんが『このまま黙って下を向いているより、友だちの気持ちを受け止めて発表して』と言われたとたん、すごい心の中で熱いものを感じました。こんなに涙が出る程、この授業に取り組んだのは初めてです。みんな3Bの仲間を信頼しているからこそ、泣きながら語ってくれた言葉なのに、今まで下を向いてよそ事を考え、ぶつかってきてくれる友だちにそっぽを向いていた自分が今日すごくはずかしかった。本当に顔から火がでるほどはずかしかった。私は授業の終わりに2回くらい手を挙げたんだけど、チャイムが鳴って発表できなかった。でも私は、私なりに今日みんなの前で語ってくれた友だちの言葉を体全体で受け止めたつもりです。最後に私をここまで変えてくれた3Bのみんな、それから先生に何かのきっかけで巡り会えたことを感謝しています。」と記してくる。

仲間を信じ自分をぶつける生徒、仲間の信頼に必死に応えようとする生徒、信頼という固い絆で結ばれつつある生徒たち、その絆をより確かなものにしていき、生徒一人一人が生涯にわたって、互いの存在を生きる支えとしていくことができるような絆とは何かを求め合い、このクラスの結束、絆を永遠のものにしたいと願い本主題を設定した。

(3) 資料について 資料名「ナイン」（井上ひさし）

井上ひさしが「ナイン」の中で示す主題は二つあるように思う。

その第一は、題名にあるように集団としての結束である。この結束は異常なまでに強固である。今風ではない。なぜ彼らは昔風とも思えるこのような結束に固執するのだろうか。

中村さんは「新道少年野球団は強かったねえ」と口癖のように言う。投手英夫の父親ということもあるが、優勝戦延長12回を戦った準優勝であるから大きな価値がある。これはもう父親にとっては誇りのようなものである。しかしその誇りを傷つけるのが当時の主将で四番打者、正太郎の行状である。できるだけ正太郎に触れたくないし、触れても「あいつの名前を聞いただけでめしがまずくなる」のである。確かに、正太郎はチームの中核であり、正太郎抜きに新道少年野球団を語ることはできないだろう。その証拠に口にしたいくないと言いながら父親はそれまで以上に

能弁になる。

正太郎の罪は旧友をだましたということで父親にとっては許し難いものであったにちがいない。しかも弱虫の八番打者の常雄まで正太郎のために自殺未遂を起こしている。

しかし、英夫も常雄も正太郎を訴えることもしないし、訴えるどころか感謝までしている。その気持ちは「おじさんにはわかりません。」とも言っている。このナインの結末は一体何であろうか。

まず考えられるのは、優勝戦をナイン一丸となって延長12回を戦って敗れたことである。勝者よりも敗者の方にドラマがあるというように敗者であったからこそナインの絆も一層大きく強かったのかもしれない。ナインにとってはまさに青春を懸命に生きた証明であったであろう。もちろん正ちゃんが日陰を作ってくれたという恩義もあったであろうし、正ちゃんはそういう存在でなければならなかったのである。しかし正ちゃんが日陰を作ってくれたということは、正ちゃん擁護の大きなきっかけであったかもしれないが、実は表層的、象徴的出来事であったと思える。そのような単に恩義に報いるものだけではなかったのではないか。その検証は井上ひさしの第二の主題に関わってくるように思うのである。

第二の主題は新道商店街への愛着である。「当時の新道には生活があった。」「新道は、ささやかではあるが、しっかりと自給自足しており、そこで小路全体に自信のようなものがみなぎっていた。……なんだかもろい通りになったような気がしてしかたがない。」「客を迎えるだけの、厚化粧だが、何だか素っ気ない小路に化けてしまったこともたしかだ。」という文章からも井上ひさしの並々ならぬ新道への思い入れと愛着が感じられる。もっと考えれば愛着というより愛惜の情さえ感じられるのではないか。

都会にしろ田舎にしろ刻々と変化していく。移ろうは世のならいかもしいかもしれないが、大切なものまで押し流していく世の移りかわりへの慨嘆がこの作品の主題となっているように思われる。この思いは「新道少年野球団は強かったねえ」という父親の言葉にもある。父親にとっては準優勝にしろ新道少年野球団は強くなければならなかったのである。そしてナインの一人一人の思いも新道少年野球団にある。英夫は中学・高校と野球を続け、高校では西東京大会の決勝まで行ったにもかかわらず、その思いは新道少年野球団に及ばないのは、それが新道という土地ではなかったからであろう。新道には新道独特の土地の匂い、土地の情、もっと言えば新道の伝統や文化があった。それが無残にも打ち壊されていく現代の非情さ、それは大和屋の引越しに象徴される新道のもろさでなかったか。正ちゃんはまさに移ろいゆく新道であった。英夫ははじめ新道少年野球団を意識するとしらないにかかわらず、そのことを認めるわけにはいかなかったであろう。正ちゃんは新道少年野球団の主将でなくてはならないし、日陰を作ってくれた頼もしい正ちゃんではなくてはならないのである。彼らにとっては新道がどう変わろうと、最も大切に失ってはならないものであっただろう。

「振り返って西を見ると、大会社の大きなビルが野球場に覆いかぶさるように立っていた。この十何年かのうちに、ここには西日が差さなくなってしまうようである。」最後の4行に、作者井上ひさしの新道に対する愛惜の情が客観的に淡々と表現されている。

3 ねらい

人間には人を人としていとおしむ心があり、その上に立って多くの人と信頼の絆で結ばれている。その固い絆が生きる支えとなっていることを理解し、よりよく生きようとする態度を養う。

〈第1時〉 変わりゆく新道への愛惜

新道少年野球団に象徴される新道のたくましが失われたことを通して、人間の結び付きの大切さを理解させる。

〈第2時〉固い絆で結ばれたナイン（本時）

騙されたにもかかわらず、正太郎を許し感謝さえする英夫を通して、固い絆で結ばれた人間の姿について理解させる。

4 指導過程

(1) 第1時の指導

展開の概要	期待する生徒の反応	指導上の留意点
1 あらすじを確認する。		<ul style="list-style-type: none"> 資料内容の事実過程の確認にとどめる。
2 中村さんが新道少年野球団について持っている思いを話し合う。	<p>A 自分自身の誇りでもある。</p> <p>B ナインがばらばらになってしまったことが寂しい。</p> <p>C 頑張り抜いた姿に感動した。生きる喜びを与えてくれた。</p>	<p>A = 誇り、B = 愛惜</p> <p>C = 生きがい</p> <ul style="list-style-type: none"> 中村さんの新道少年野球団への愛着とその奥に流れるものに気づかせる。
3 新道にとって、新道少年野球団とはどんな存在であったかを考える。	<p>A 新道そのものであり、当時の新道のようなたくましさがあった。</p> <p>B 新道に暮らす人たちの誇りであった。</p> <p>C 新道に暮らす人たちの生きる支えのようなものであった。</p>	<p>A = 象徴、B = 誇り</p> <p>C = 生きがい</p> <ul style="list-style-type: none"> 新道少年野球団は、かつての新道そのものであったことに気づかせる。 (Aへ収束したい)
4 新道少年野球団に象徴される新道の変化の中で失われつつあるものが何であるかを考える。	<p>A 自信がなくなり、外からやってくる人に頼らなければ生きられなくなった。</p> <p>B とてもにぎやかになり、経済的に豊かになった。</p> <p>C 人と人とのつながりがうすれてきた。</p>	<p>A = 精神的貧しさ</p> <p>B = 経済的豊かさ</p> <p>C = 連帯</p> <ul style="list-style-type: none"> 新道の変化の中で、人と人との結び付きまでもが失われつつあることに気づかせる。 (Cへ収束したい)
5 「ここには西日が差さなくなってしまったようだ」という作者の中にはどんな思いがこみ上げてきたかを考える。	<p>A 快適に暮らせることが、かえって人間同志の距離を遠ざけているのではないか。</p> <p>B かつての新道に対するなつかしさと、こんなに変わってしまったという気持ちがこみ上げてきた。</p>	<p>A = 連帯、B = 愛惜</p> <ul style="list-style-type: none"> かつての新道の中にあっただよさに気づかせる。

(2) 第2時の指導(本時)

展開の概要	期待する生徒の反応	指導上の留意点
1 前時の確認をする。		<ul style="list-style-type: none"> ・新道の変化を中心に前時の確認をする。
2 陰を作り合いながら、試合を乗り越えた時のナインたちの気持ちについて考える。	<p>A 英夫は陰を作ってくれた正太郎やナインたちへの感謝の気持ちでいっぱいだった。</p> <p>B 支え合う仲間をもてたという誇りがあった。</p> <p>C 自分たちにはできないことはないんだという気持ち。</p> <p>D 本当の友だちなんだ。</p>	<p>A = 感謝、B = 誇り C = 連帯、D = 友情</p> <ul style="list-style-type: none"> ・苦しみを乗り越えたことがナインの結びつきを強めていったことを理解させる。 (Cへ収束したい)
3 現在の正太郎についてどう思うかを話し合う。	<p>A 信じてくれる仲間を裏切ることとは許せない。</p> <p>B 家庭の事情が正太郎をゆがめていった。</p> <p>C 人として絶対許せない行為である。</p>	<p>A = 連帯、B = 寛容 C = 正義感</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正太郎のやったことは、決して許されることではないことを押さえて話し合わせる。
4 騙されていながら、許すばかりでなく、英夫はなぜ正太郎に感謝するのかを考える。	<p>A 正太郎をいつまでも大切に思っている。</p> <p>B 正太郎を大事な仲間と思って信じている。</p> <p>C 正太郎を否定することは、英夫の生きる支えを否定することにつながっている。</p>	<p>A = 友情、B = 連帯 C = 生きがい</p> <p>(Cへ収束したい)</p>
5 「その気持ちは今でも心のどこかに残っていると思います。だから…」という英夫にはどんな思いが込められているのかを考える。	<p>A どんなことがあっても正太郎は正太郎なんだ、ナインにとってはみんなかけがえのない仲間なんだ。</p> <p>B 正太郎を支えとして精一杯生きていきたい。</p> <p>C どんなことでも解決できる。</p> <p>D ナインの一人である正太郎を信じたい。</p>	<p>A = 連帯、B = 生きがい C = 自信、D = 信頼</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正太郎との絆を信じ、正太郎に応えようとする英夫の思いが、英夫自身の生きる支えとなっていることに気づかせる。
6 授業のまとめをする。		<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の言葉で授業を終える。

ナイン

井上ひさし

放送局での仕事が思いがけず早く終わったので、四ッ谷駅前の新道にある中村さんの店に寄ってみた。中村さんは畳屋の主人である。店は小さいが裏手に大きな仕事場を持っている。東京で五輪大会が開かれた年の暮れから3年間、わたしはその仕事場の2階を借りていた。8畳の台所付き食堂に6畳が二間と4畳半、そのうえ広い風呂場と風通しのいいベランダまであって、家賃は月4万5千円だった。当時の相場の2割方は安かったと思うが、それはとにかくそれほどの間取りを上に乗せることができるぐらい中村畳店の仕事場は大きいのである。その2階にいまは長男の英夫くん夫婦が住んでいる。

中村さんはスポーツ紙を眺めながら、茶筒に入れた煎餅をかじっていたが、わたしを見ると、「ここへ来て、おやつをつき合ってやってくださいよ。」

と、針だこでたらこみたいに脹れ上がった指で火鉢の横の畳を軽く打った。スポーツ紙の見出しに誘われて話題は自然に野球のことになったが、そのうちに中村さんは急に膝を進めてきて、「新道少年野球団は強かったねえ。」

ライオンズもジャイアンツも問題じゃないというような、力の入った口調で言った。

「なにしろ新宿区の少年野球大会で準優勝したぐらいだからなみの強さじゃなかったな。それも決勝戦を延長12回までたたかっただけの準優勝だ。つまり新道少年野球団は優勝したも同じさ。だいたい優勝チームには投手が3人もいたんだからずるいや。ひきかえ新道には英夫が一人しかいなかった。しかも午前中の準決勝と合わせてぶっ続けて19回も投げとおしたんだよ。それも真夏のかんかん照りのもとでの19回だ。英夫も、新道少年野球団も、ほんとうによくやった。」

「覚えてますよ、あのときのことは。こちらの仕事場の2階を借りて2度目の夏のことから。」

「すると、あなたも外濠公園野球場へ詰めかけてきなさっていた口か。」

「いや、夕方、放送局から戻ってくると、ちょうどバレードにぶっかつたんです。」

」大学の学生が増え、近くに大会社のビルがいくつも建ったせいで、道幅4メートル、長さ100メートル足らずのこの新道は四谷で一番にぎやかな場所になった。もっとも軒を並べる店は飲み屋に食べ物屋に喫茶店のどれかに限られてしまい、客を迎えるだけの、厚化粧だが、なんだか素っ気のない小路に化けてしまったこともたしかだ。17、8年前と同じ店構えでがんばっているのは、新道入口のワイシャツ店と、小路の奥のこの畳店ぐらいなものである。当時の新道には生活があった。豆腐屋があり、ガラス店が、お惣菜屋が、ビリヤード屋が、そして主人が会社勤めの普通の家があった。四ッ谷駅のほうから新道を抜けようとする人は、ゆるやかな勾配の坂を登ることになるが、その坂の真ん中のあたりには歌舞伎役者の大和屋（十世岩井半四郎）の住まいもあって、夏の宵などには、白木づくりの玄関の前の、狭いがよく打ち水した石畳の上で、大和屋が中学生のお嬢さん2人とよく線香花火をしていた。2人のお嬢さんはやがてよく知られた女優になるのだが、ひとことで言えば、そのころの新道は自足していたのである。たいていの日用品は新道のなかにある店屋で十分に間に合っており、それらの店屋はまた新道に住む人たちだけを相手にして、とにかく暮らしが立っていた。新道は、ささやかにではあるが、しっかりと自給自足しており、そこで小路全体に自信のようなものがみなぎっていた。いまはたしかに華やかな小路になっているけれど、外からやってくる客の懐中をあてにしないとやっていけないとい

うところが見えて、なんだかもろい通りになったような気がしてしかたがない。

「主将の洗濯屋の正太郎くんが、小さな、準優勝のカップを抱いて大和屋の前を通るところで、わたしはバレードに間に合ったのです。正太郎くんの横には英夫くんがいた。その後ろで7人が団子みたいにかたまって、くすくすんやっていた。ピリヤード屋のおじさんが監督をしていると聞いていたのに、その姿がなかった。あれ、おかしいなと思った記憶があります。」

「ピリヤード屋の大将は決勝戦が始まるとすぐ暑気中りを起こしてひっくり返ってしまったのさ。60を4つも5つも過ぎていたんだから、これは責められない。それにしても監督なしで、あの9人、よくも12回までもちこたえたものだ。ほんとうに新道少年野球団は強かった。」

「大和屋がお嬢さん2人と出てきて、正太郎くんに御祝儀袋を渡した。その光景も覚えていますよ。大和屋が『よくやったねえ、お疲れさま。』とねぎらうと、それまでくすくすんやっていた9人が一斉にわーっと泣き出した。」

「よほどくやしかったのさ。」

「あの9人はいまどうしていますか。もちろん英夫くんのごことはよく知っていますが。」

「ばらばらになってしまったさ。」

中村さんはちょっと目を伏せた。

「一壘をやっていた洋品屋の明彦は大学を出て会社員になった。洋品屋は地所を売って千葉のほうへ引っ込んだ。明彦はそこから丸の内の会社に出ているそうだよ。二壘のお惣菜屋の洋一は新宿のホテルでコックをやっている。」

中村さんは新道少年野球団のナインのその後の消息によく通じていた。それによると、三壘のガラス店の忠くんはコンピュータ技師、遊撃の文房具店の光二くんは神奈川の中学校教師、左翼の豆腐屋の常雄くんは埼玉で自動車学校を経営しているという。

「この近くにいるのは右翼の魚屋の誠だけかな。誠は放送局の前で小料理屋をやっている。」

「豆腐屋の常雄くんが自動車学校の経営者とは意外でした。あのときはみんな小学校の6年生、つまりいま、やっと30歳でしょう。その若さで自動車学校を経営するなんてすごいじゃないですか。」

「タクシーの運転手をしているときに、そこの社長の娘に見染められたらしいね。で、その社長が自動車学校の経営者でもあったわけさ。」

「なるほど。」

「そういうわけで、みんな新道から出て行ってしまったねえ。ここの地価は高い。3、40坪の狭い土地でも、処分すれば郊外に家を建てたうえ、びっくりするほどのお釣りがかえってくる。だから親たち競争で土地を処分してしまった。お釣りは老後の資金というわけだね。そうそう大和屋も若葉町のほうへ引っ越したよ。」

中村さんはなぜだか、洗濯屋の正太郎くんのことを抜かしてしまっている。新道少年野球団の4番打者で、捕手で、主将の正太郎のことになぜふれたがらないのか。

「正太郎のごことは口にしたいくないんだよ。」

中村さんはこっちの胸のうちを見抜いたように言った。

「あいつの名前を聞いただけでめしがまずくなる。英夫のやつ、あの正太郎のために畳を85万円分も騙し取られてね、そればかりか、おれが警察に届けようとしたら、『それなら僕はこの家を出ていきます。』なんて言って脅かすのさ。幼友だちをかばうのはいいが、それにも限度ってものがある。」

口にしたいくないと言いながら、正太郎くんのことに話題が及ぶと、中村さんはそれまで以上に

能弁になった。2年前の冬、ひょっこり正太郎くんが訪ねてきて、畳を注文したという。そのときの口上はこうだった。—今度、練馬にある不動産会社で働くことになった。これまでいろいろと心配をかけてきたが、今度こそ性根をすえてやる決心だから、どうかご安心いただきたい。ところでうちの社は建売住宅をつくって売ってもあるのだが、出入りの畳屋がぐずな畳ばかりおさめてくるので担当者が弱り切っている。それを見て、会社に自分を売り込みたいという気もあって、つい、「畳なら僕におまかせください。」と請け合ってしまった。無理を申してすまないが、明朝まで建売5軒分の畳を都合してはくれまいか。—中村さんはこの口上を眉に唾つけながら聞いていたという。正太郎くんが昔の友だちから寸借詐欺をして歩いているという噂を何度も耳にしていたからである。だが、英夫さんに「正ちゃんを信じてやってください。」と頼まれて、息子の親友のためにひと肌ぬぐ気になった。足りない分は同業者を回り歩いてかき集め、翌朝、トラックに乗ってやってきた正太郎くんに引き渡し、そしてそれっきりだった。

「あのとき、正太郎を警察に渡しておけば、豆腐屋の常雄もあんな苦勞をしないですんだのにな。常雄は薬を飲んで自殺しかけたんだ。」

去年の春、正太郎くんは常雄くんの自動車学校に現れた。掃除夫でもいい、どうか雇ってくれという。そこで常雄くんは旧友を事務員にした。夏、正太郎くんは事務室の金庫から400万余りの現金を持ち出し、姿を消した。常雄くんの奥さんも同時に家を出てしまった。正太郎くんはいつの間にか常雄くんの奥さんとねんごろになっていたらしい。常雄くんは自殺を図り、間もなく奥さんがぼろぼろになって戻ってきた。

「奥さんはよほどこたえたらしく、生まれ変わったようになって常雄につくしているそうで、それはめでたい。だがね、あの常雄が薬を飲む光景を思いうかべると、そのたびに涙が出てしかたがない。あいつは弱虫の8番打者でねえ、死ぬということが一番恐がっている子なんだ。その子が死のうとした。よほど辛かったにちがいない……。」

「それで常雄くんはどうしました。正太郎くんを訴えたんですか。」

「それがやはり正太郎のやつをかばうんだよ。警察へもどこへも届けでなかったそうだ。」

「新宿区少年野球大会の準優勝チームの主将だった子が、どうしてそこまで崩れてしまったんでしょうか。」

「それはおれにもわからない。ただ、洗濯屋はしょっちゅうもめていたからね、大将の女出入りで。そのたびにものすごい夫婦げんかになり、そのたびに正太郎のやつは家を出ていたねえ。」

「お父さん、畳の仕上がりを見てやってください。」

皮の肘当てを外しながら奥から英夫くんが出てきた。

「4時にはもう運び出さなくちゃなりませんから。」

「おまえが見て、それでよしということになれば、だれからも苦情は出さないさ。」

と言いながらも、中村さんは息子が自分を立ててくれていることがうれしらしく、身軽に立ち上がり、

「ちょうどいま、おまえたちが正太郎に大甘だつて話をしていたところだ。それにしても新道少年野球団は強かったねえ。」

と奥へ入った。

「お父さんは間もなく隠居しますねえ。英夫くんに一目も二目も置いているもの。いまのやりとりを聞いていて、そう思いました。」

「だとしたら正ちゃんのおかげかな。」

英夫くんは火鉢に手をかざした。右の指には針だこがいくつもできている。

「正ちゃんに85万円、騙し取られてからですよ、本気で仕事をするようになったのは。なんていうのかな、正ちゃんをつくった穴を一日でも早く埋めなくてはと思い、それで仕事に精を出すようになったというところかな。常雄にしても、正ちゃんを憎みながら、感謝しているところもあるだろうと思うんです。父は常雄のことも話したんでしょう。」

わたしはうなずいた。

「常雄の奥さんは家付き娘を鼻にかけた高慢ちきな女だったんですよ。それが正ちゃんと問題を起こしてから別人のようになったんです。正ちゃんは一見、悪のように見えるけど、やはり僕らのキャプテンなんですよ。結局は、僕らのためになることをして歩いているんだ。」

「決勝戦までいっしょになってたかうと、そこまでチームメイトを信じるようになるのかな。うーん、わかるような気がする。」

「おじさんにはわかりません。」

英夫くんはわたしを見すえて言った。

「父にもわかりません。父は土手の木陰で試合を見ていただけですから。僕は中学でも高校でも野球をやっていた。高校3年のときは西東京大会の決勝まで行きました。でも、あんな思いをしたのは、あのときだけです。」

英夫くんの強い口調に気圧されて、わたしは少し体を引いた。英夫くんは軽く唸りながら言葉を探しているようだったが、やがてこう切り出した。

「口に出すと、なにもかも嘘になってしまうような気がするんですが、ええと、そう、準決勝も決勝も新道チームのベンチは三塁側でした。ベンチには屋根もなにもなくて、ただ、木の長い腰掛けが備えつけられているだけです。」

四ッ谷駅を新宿側に出て外堀通りをだらだらと市ヶ谷のほうへ下って行くと三角形の公園がある。そこが外濠公園野球場だ。公園は外堀通りから一段低い堀を埋めてつくられている。当時は、野球場はまだ金網で囲われてはおらず、外堀通りから土手を下りて球場に立つことができた。土手には桜の木が植えてあったが、この土手が一塁側とネット裏スタンドになった。つまり三塁側のチームはいつも陽に灼かれていなければならないが、一塁側のチームは少なくとも自軍の攻撃中は桜の土手のつくる日陰の下で汗をふくことができる。あの夏の1日、三塁側に陣取った新道少年野球団はきっと死ぬほど辛かったろう。

「……決勝戦の6回ごろだったと思いますが、ベンチに戻ってぐったりしていると、さっと涼しくなりました。見ると、正ちゃんが僕の前に立って日陰をつくってくれているんです。正ちゃんにならってナインが僕の前に立ち始めました。これが12回まで続いたんです。僕が完投できたのは西日をさえぎってくれたあの日陰のおかげです。途中、常雄がふらふらっとしかけましたが、そのときも正ちゃんが言いました。『常雄も日陰に入れ。遠慮するな。これはキャプテン命令だぞ。』って。パレードのとき泣いていたのもうれしかったからです。自分たちは日陰なぞあり得ないところに、ちゃんと日陰をつくったんだぞ。このナインにはできないことはなにもないんだ。そんな気持ちでいっぱいでした。その気持ちはいまでもどこかに残っていると思います。だから……。」

中村畳店から、わたしは外堀通りを市ヶ谷へ向かった。金網越しに野球場を見ると、木枯らしに吹き上げられた砂煙がグラウンドを走り回っている。振り返って西を見ると、大会社の大きなビルが野球場に覆いかぶさるように立っていた。この十何年かのうちに、ここには西日が差さなくなってしまうようである。

1991年度第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業の記録（板野中学校）

主 題 「生きる絆」

1991年10月31日（木）

資 料 「ナイン」（井上ひさし）

会 場 徳島市富田中学校体育館

3年B組 授業者 森口 健司

T 1: 今日生きることを意味を求めて、みんなの思いや願いを語り合いたいと思います。最初に前の時間話し合ったことについて、前の時間の板書を見ながら振り返ってみたいと思います。新野（男）新道という街は、新道少年野球団があったことで活気づいてとても温かい街になったと思います。そしてその中で人々は、新道少年野球団を新道の象徴として新道にはなくてはならない存在だと思っていたと思います。

森川（男）新道少年野球団は新道の誇りであり、象徴であったと思います。新道は変わってしまったけれど、ナインのみんなには変わってほしくないという思いが中村さんにはあって、昔の新道のような家族のつながりがいつまでもあってほしいんだったと思います。

川田（女）新道少年野球団は、新道にとってすごく大きな存在であったと思います。中村さんにとっても昔の思い出を語れる最高のチームだったと思います。

圓藤（女）新道少年野球団に象徴されるみたいに、新道は華やかになったけれどその代わりに人と人とのつながりとか自信とか、そんなのがなくなったというのが1時間目の一番大きな印象です。

村山（男）新道と新道少年野球団はお互いに支え合う関係があって、それで新道は自分の子どもたちが少年野球団にいたから、その新道の人たち全体のつながりがあっていろいろ結び付いていて、その新道について話すにはいつも新道少年野球団のことが出てきたりして、それで今は新道少年野球団の方は何か離れ離れになったけど、新道は何か商店街としてにぎやかになったものの人と人との関わりとか接触はなくなって、この新道は一つに家族だったけどその家族的な何かが失われつつあると思います。

久保（男）新道と新道少年野球団は本当につながっていて、だれからも愛される存在であってやっぱり何かで結ばれていたと思います。

井上（女）前の時間勉強して新道と新道少年野球団というのは、同じようなものだったと思います。新道の人たちが見せた人間と人間の絆というのがナインの見せた絆であって、新道が変わっていくと共にナインのみんなも変わっていったから、中村さんは昔の新道少年野球団を思い起こすことによって、昔のままの人間と人間のつながりのあった新道のままで変わらないでほしいと願ったんだと私は思いました。

T 2: 中村さんの思いを通して、新道少年野球団や新道商店街について考えてきたわけですけど、この時間は陰をつくり合いながら最後まで決勝戦を戦い抜いた新道少年野球団のナインの気持ちについて話し合いたいと思います。（板書①）

稲井（女）英夫が炎天下で12回を完投できたのは陰をつくってくれた正太郎のおかげだし、その周りで支えてくれたナイン一人一人の支えて12回まで完投できたんだと思います。

中山（女）陰が一つもないところでの試合は本当につらかったと思います。ナインが陰をつくってくれた時にあまり暑さは変わらなかったかもしれないけれど、この英夫には何十倍も涼しく感じられたと思います。そして、そういうふうに支えられ励まして励まされてきた仲間とだったから、やっぱり最後まで頑張れたんだと思います。

漆原（男）もう6回まできたら、もう英夫もかなりバテていたと思うんです。そこへ正太郎の日陰がきて、やっぱりすごく驚いたと思うんです。正太郎自身はそんな友情とか、そんな関係なくて勝ちたい一心のところそういう考えができてきたと思うんです。でも他のナインから見たら、正太郎がすごくすばらしい人間に見えて、また自分たちナインの友情もあるんだなあというのを感じたと思います。

T 3：正太郎が日陰をつくったということにふれて、今発言がありましたけど、漆原君の発言につなげてほしいと思います。

井上（男）やっぱりみんなの言うようにこんな厳しい中で戦ったんだから、ナインの関係も深まっていったと思います。そして、あのバレーの時に泣いていたのは、やっぱり陰をつくり合うという関係が深まって悔しさよりもすごい嬉しさがあつたと思うし、涙を流したのもその嬉しさがこみ上げてきて涙が出てきたんだと思います。やっぱり正太郎を中心としてナインが一丸となって戦ったことが、ナインのみんなも英夫もそのことが嬉しかったんだと思います。

松本（男）ナインはやっぱり陰をつくり合ったりして、心が一つになっていたと思います。心が一つになったから、あとあとで英夫や常雄たちも正太郎が悪いことをしても、警察に訴えることができなかつたと思います。正太郎が陰をつくらなかつたら、今のナインの関係はなかつたと思います。（板書②）

加藤（女）それぞれ真夏の暑い中、戦っていてしんどいのに仲間を支えながら試合をしたことはすごく感動したし、もし私がその中の一員であつて試合を乗り越えた時の気持ちを考えると、仲間を支え合つた満足感でいっぱいだったと思います。

楠本（女）この試合を乗り越えられたのは、お互いに助け合つてこの試合をみんなで乗り切ろうという気持ちと、みんなで力を合わせて勝つたという気持ちがあつたと思います。みんなで団結して試合をしたいという気持ちがあつたと思います。

廣瀬（男）このナインが陰をつくつたことによって、ナイン全体が一丸となって本当に良いチームとなつたと思います。だから心が一つになって戦えたことが嬉しくて泣いたんだと思います。

仲田（男）ナインは9人で一人というように、みんなが助け合つて一人が苦しんだらみんなが苦しむというように、みんな助け合つて支え合つていけたから、最後まで戦い抜けたと思います。

井上（女）さっきの漆原君の意見についてだけど、正太郎が陰をつくつたのは、自分が勝ちたい一心だったと言つたけど、私はそうじゃないと思います。やっぱり正太郎は英夫を少しでも楽にしてやりたいと思つて、英夫を思う気持ちから陰をつくつたと思うんです。私はやっぱり英夫とかナイン全体のことを思つてやつた行動だと思います。

中山（女）私も井上さんと同じ意見で漆原君の意見とはちょっと違うんだけど、やっぱり勝ちたい一心というんじゃないで、仲間のことを本当に大切に思つていてみんなでいっしょに最後まで頑張りたかつたからで、やっぱり一人しかいない投手の英夫が本当につらい思いをしているので、ちょっとでも力になってあげたくて、勝ちたいとかそういうんじゃないで、自然とそういうことができたんだと思います。

村山（男）僕も同じで英夫がピッチャーをやつて正太郎がキャッチャーだつたから、英夫も球に球威がなくなれば一番わかるのがキャッチャーだから、正太郎は英夫の疲れぐあいが一番わかり、日陰をつくるという行動をとつたんだと思います。そして、ナインも正太郎にひかれて、やっぱり全員で勝ちたいという気持ちがあつて、一人が疲れることにより全員が駄目になるんじゃないで全員が勝ちたかつたからこそ、その一人を支えていくことのできる関係がそのナイ

ンの中にはあったんだと思います。

藤田（男）僕は漆原君と同じでやっぱり正太郎が日陰をつくってあげたのは、僕がもし正太郎だったとしてもキャプテンとしてというか、捕手としてキャプテンとしてベンチでぐったりしているピッチャーを見たらもう見ていられなくなってしまって、日陰をつくったり頭を冷やしてあげるような最善の努力をしてあげると思います。だから僕は正太郎は勝ちたい一心で陰をつくったような感じがします。

松本（男）僕はやっぱり漆原君や藤田君とは違って、勝ちたい一心もあったかもしれないけれど、やっぱり捕手と投手は心が通じ合い、投手のつらい気持ちがものすごくわかり、この試合を精一杯頑張っていきたいと思っていたからだと思います。

中山（女）藤田君になんだけど、ぐったりしている英夫を見て何とかしてあげたいとか、そういうふうと思うのはやっぱり仲間を思う気持ちだと思います。でももし勝ちたいんだったら、ぐったりしているのを見て何とかしてあげたいとかいうんじゃないで、一番始めにこのままだったら勝てんようになるかもしれというようなことを考えるのに、ぐったりしている英夫を見て陰をつくって上げたい、何か力になることをしてあげたいと思うのは仲間を思う心だと思います。

岡本（男）正太郎は英夫が疲れているのを見て、勝ち負けは別として最後まで英夫を始めとするナインと最後まで戦いたいと思ったから陰をつくったんだと思います。

T 4：共に頑張りがかったということですね。

赤澤（男）僕も正太郎が英夫に陰をつくったというのは、みんなでこの試合を乗り切っていかなければならないと思ったからだと思います。それだけナインは一つになれたんだと思いました。

T 5：一つにつながったということですね。正太郎を中心にあれだけ頑張った。そういう関係であった。それにもかかわらず正太郎は驚くほど変わってしまった。今の正太郎について、変わってしまった正太郎について、みんなが思うことを語ってほしいと思います。

村山（男）かつての正太郎はナインを引っ張っていく統率力があって、リーダー的存在の強い人だったから、ナインがついていって正太郎にも人を思いやる心があって、ナインにもその正太郎についていきたいという思いがあったと思います。でも、その正太郎が今では、心から信じ合っていた仲間から寸借詐欺とか人を騙す行為とかをしていて、それは絶対に許せん行為だけど、正太郎の家では家庭の中でお父さんの女出入りとかがあって、しょっちゅうもめていて喧嘩のあるたびに正太郎は家出をしていたと資料の中にあったけど、そんな家庭だったからこそ正太郎がそこまで変わったんだと思うし、周りの大人によって子どもは大きく左右されるし、影響もされやすいものだと思いました。

廣瀬（男）今の正太郎は許せないと思いました。旧友だから騙していいのではなくて、旧友だからこそ騙してはいけないのだと思いました。陰をつくり合いながら19回を投げきったせっかくの絆を一人のせいで壊してしまっただけだと思いません。

圓藤（女）村山君は小さい時からの家庭の事情が原因で変わってしまったと言ったけど、昔からそんな複雑な家庭環境におかれても、正太郎はしっかりとキャプテンとして新道少年野球団を引っ張ってきたんだから、家庭のもめ事は理由の一つではあるけれど、正太郎がこんなに変わった直接の原因にはならないと思います。

T 6：今の意見についてどうですか。

井上（女）私は村山君の意見と同じで圓藤さんの意見もわかるんだけど、やっぱり子どもという

のは、周りとかそういうのに流されやすくて、だから正太郎も社会の流れとか家の中の事情とかに負けてしまったんだと思います。そして、正太郎はずっと耐えていたものがあったと思うけど、それは新道が変わってしまったとたんに、やっぱり正太郎も心の支えみたいなものがなくなって、今まで親のそういう行動とかも我慢していたけど、やっぱり我慢できないようになったんじゃないかなと私は思います。

T 7: 今の発言に承えてどうでしょうか。

井上(男) どんなに家の事情があっても、やっぱりそこまで信じてくれるナインのみんなを裏切ってまで、そんな悪い行動をするのは、やっぱり正太郎は許せないと思いました。

中山(女) 井上君も言っていたように、今現在の正太郎は悪いと思います。これはもうみんながわかっていることだと思うけど絶対悪いです。でもやっぱり周りの人間のマイナスの影響とか、家族のいろんなめ事があったりして、新道が変わっていく中でやっぱり正太郎の中でも、何か変わっていくものがあったんだと思います。

T 8: いろいろと意見が出てきたけど、今の発言に触れてどうですか。

小川(女) やっぱり人を騙しながら物を盗むことは、どんなことがあっても悪いことだと思います。もしそれで人が亡くなっていたら、大変なことになっていたと思います。だから絶対に正太郎がしたことは悪いと思います。(板書③)

廣瀬(男) あの正太郎が今こんなにおかしくなっているのは、家庭内でいろいろあったためだとしたらそれはやっぱりおかしいと思うんです。そのためにナインを裏切るというのは、さっきの日陰をつくったときの気持ちに当てはまると思うんですけど、あの日陰をつくってあげたときにナインのことを心から思っていたら、今は裏切っていないと思います。だから、日陰をつくったときの気持ちもやっぱり怪しいような感じがします。

松本(男) 僕はこの正太郎は昔は良いことをしたような感じがするけど、やっぱり今は本当に悪いと思います。それから常雄や英夫はこの正太郎を訴えることができなかったと書いてあったけど、僕だったら正太郎はやっぱり昔心一つにして頑張った仲間だからやっぱり信じているし、訴えようと思っても後でもとにもどってくれると信じて、訴えることができなかったと思います。

T 9: 今の松本君の発言につなげて。

村山(男) 訴えるか訴えないかということなんだけど、僕の場合は訴えられないという方の意見です。英夫と常雄は実際に正太郎のことを訴えなかったけど、英夫たちの気持ちの中には、正太郎が騙し取ったものは絶対いつかは帰ってくると信じていると思うんです。そんなに信じるのは、少年野球団のときに陰をつくってくれたりして、実際に支えてくれてとても力強い存在だって、とても尊敬していたからだと思うんです。もし、正太郎を訴えたら自分の尊敬している人を消してしまうことになって、正太郎を支えとして頑張った部分までも消えてなくなってしまうと思ったから訴えられなかったんだと思います。

T 10: 今の松本君と村山君の発言にかかわってくるんですけど、正太郎のしたことは絶対に悪いことであり人として許せない絶対に悪いことですよね。これはさっき中山さんも言いましたけど。にもかかわらず英夫は許すだけでなく、「一人前になれたのは正ちゃんのおかげだ」と正太郎に85万円という大金を騙し取られておりながら正太郎に感謝までする。その許すだけでなく感謝までする英夫について、みんなが思うことを聞かせてください。(板書④)

佐々木(女) 英夫は本当はすごく正太郎のことを憎んでいると思います。けどあの日陰をつくっ

てくれた正太郎の優しさやナインみんなでつくった思い出を嘘にしたいくないという気持ちがあったと思います。

土内（女）人間のだらしなさやうぬぼれで自分だけ幸せを求めていくようになった世の中の流れの中で、英夫は85万円分騙し取られたことによって、人間として大切な人間の結び付きだけは失いたくないと思ったんだと思います。

小川（女）西日を遮ってくれた正太郎だし、新道少年野球団での仲間でもあったので、やっぱり全然日陰のないところに日陰をつくってくれたその思いが、心に残って感謝という英夫の思いがどうしても正太郎を訴えることをさせなかったんだと思います。

井上（女）英夫というのは昔の人間と人間のつながりがあった新道がすごく好きで、今の新道は変わっているけど、その昔の新道に思いを寄せて今まで頑張ってきたんだと思います。そして、新道と言えばやっぱり新道少年野球団が出てきて、新道少年野球団が出てくるということは、正太郎が陰をつくってくれたということがやっぱり出てくるんだと思います。だから、そのことを否定することになれば、自分の心の支えをなくすことになるから、そのことはすごくいやだから、もう正太郎がやったことはすごく許せないけどできるだけ正太郎を美化するというか。何でも悪いことをいいことの方に思うように英夫はしているんだと思います。

T11：（板書⑤）心の支えだったということ。

新野（男）正太郎が英夫の心の中ではなくてはならない存在になっていて、そして正太郎を信じないということは、英夫自身を信じないということになると思います。

中山（女）私は最初憎んでいるのに感謝するという意味がわかりませんでした。さっきも出てきたことなんだけど、警察に届けるか届けないかという話なんだけど、きっと私が英夫の立場だったら警察に届けると思いました。それは英夫に陰をつくってくれたのは正太郎だったけど、同じ野球をやっていたメンバーも一緒に陰をつくってくれたので、正太郎だけが陰をつくってくれたのではないと思しながら、正太郎一人よりもたくさんのナインの方を選ぶと思ったからです。そんなことをいろいろ考えているときに、一人の友だちに言われたんだけど「もし私が部落の人間として、私がこれからのこと今のこといろいろと悩んでいてその苦しみをわかってほしくて、『私は部落の人間です』って、この3年B組のみんなに打ち明けたら、そのとき3年B組のみんなが温かい眼差しで『何言よん、そんなこと関係ないよ、これからいっしょに学んでいこう』と言ってくれたとき、それが陰をつくってくれたことになるんと違うん。私はそう思うんよ。」と言ってくれたんです。そのとき私はハッとしたんです。英夫と正太郎の関係は私たちが部落問題の学習で築き上げてきた関係とよく似ていると思うんです。どんなことがあっても否定できない、どんなことがあっても切れることのない関係というものが、人間には必要なんだと思うんです。私たちは今まで一生懸命に部落問題の学習に取り組んできました。私の住んでいる板野町には部落と言われて差別されている地域があります。この学習に真剣に取り組み始めたのは、差別を受けて悲しんでいる友の叫びを聞いてからです。今思ういろいろなことがあったけど頑張ってきてよかったと思います。この学習を始めてからナインのような関係ができてきたと思います。一人の子が自分のことを告白する周りのみんなが支える。そしてその子の笑顔がみんなの支えになります。ナインと同じだなあとと思います。

井上（女）私も中山さんの言った通りだと思います。このナインの関係というのが私たち今の3年B組の関係であってほしいと私は思いました。これは私もやっぱり中山さんの言うように、どうして英夫は正太郎のことを許すのかなあと考えていたけど、中山さんと考えていて、やっ

ばり支えてもらったということはすごく嬉しいことだし、私も2年生からずっと公開授業とか全体学習とかをやってきて支えてもらったことがたくさんあって、そのときのことが今もはっきりと心に残っているし、英夫というのはやっぱり正太郎が支えてくれたことがすごく嬉しかったんだと思います。

井上(男) 今聞いていて、やっぱりこのナインの資料は何か僕たち3Bにあてはまると思います。これから徳島県も板野町も発展していくと思うし、やっぱり昔の板野がよかったなあとと思うことがあります。僕たちは中学生だけど、これから高校へ進学したり就職しても、こんなナインのような関係になっていきたいなあと思います。

村山(男) やっぱりこのナインの資料の中には、部落問題学習で学んできたことを土台として考えた方が何かわかりやすいところがあると思います。国語の学習という意味で考えたら答えを見つけるために決まった答えを探すために、みんな同じような考え方になっていくと思うんです。でも部落問題の学習では、お決まりの答えを求めるのではなくて自分の本当に感じたことや自分の中でこみ上げてきたものを意見として語り合うことによって、どれだけ周りが反応してくれるかということが大切だと思うんです。本当の思いと思いをぶつけ合うところに同和問題学習の本当の意味や喜びや楽しさがあると思うんです。また、今まで積み上げてきた同和問題学習によってこのナインの関係は3Bの中にもいっぱいできてきたと思うんです。支え合うということは本当に大切なことだと僕もしみじみ思っています。自分が発表したときに周りが支えてくれて、もっと頑張らないかん、こんな仲間のためにももっと頑張らないかんと思ってきたんです。実際僕は2年生のとき自分の一番苦しい部分をみんなに訴えたとき、みんながどんな反応をするかがとても不安だったんです。そのときに「そんなこと気にするな、いっしょに頑張りよう」という意見があって、ものすごく嬉しかったんです。このナインの団結とか支え合うということを考えていくうちに、やっぱりみんなのことが真っ先に出てきて、それでこんな大きな授業とかをたくさん経験してきたから、ある程度は自分の思うままの意見が言えるようになってきたと思うんです。それでさっき井上君が言ったように、板野町とか徳島県とかもだんだんと変わっていくと思うんです。変わっていくことによって、昔の方がよかったなあという気持ちも残ると思うけど、大きくなってからも周りにこんな仲間がいて、互いに支え合って生きていくことができたらすばらしいと思います。これから高校へ行ったり就職したりして、周りの仲間に自分の心を開いて話のできる人がいなかったら差別されるかもしれません。だけど、今はこの周りに仲間がいるからどんなことがあっても頑張っていくことができます。実際、将来負けそうになったときも、今のこの仲間に相談できるような関係をつくっていきたいと思います。

松本(男) このナインとこのクラスはほとんど一緒だと思います。ナインも助け合ったり、支え合ったり、協力し合って何か一つのことを頑張っているし、僕らのクラスもやっぱり一人一人が、一人がみんなをみんなが一人を支え合い励まし合って、部落問題学習に頑張っているから似ていると思います。それから今この学習を頑張っていて、やっぱりさっきも言ったんだけど、もう少ししたら中学も卒業で就職や進学をするし、やっぱり就職や進学したら、目に見える差別に出会うことも出てくると思うんです。だから今のこの関係やこの思いとかを忘れないで頑張っていかなければいけないと思います。

圓藤(女) 私もみんなが言うようにナインとこのクラス3Bはよく似ているなあと思いました。それで先生が道徳教育と同和教育は違うって言いましたよね。確か、この大会で部落問題ずば

りの資料はできんと言いましたよね。でも私はこの資料「ナイン」の学習で、ナインは私たちのクラスに似ているなあというところが出てきたけど、私たちのクラスの今の関係は今までの部落問題の学習によって成り立っているんだから、道徳教育と同和教育は全く一緒ではないかもしれないけど、結局はつながっているんだと思います。

井上（女）圓藤さんの意見が出ただけで、私たちがこの富田中学校にきて授業をすると聞いたとき、私たち3年B組は部落問題の学習をするもんだと思っていたのに、こういう直接同和問題に触れない資料をするということでちょっとやりにくいなあと思っていたけど、結局同和問題の学習も道徳の学習も一緒に人間の生き方につながっているものだから、みんないろいろな意見が出たと思うんです。結局人間というものは支え合ったりして生きていかなあかんもんやし、だから、私は社会の流れとかに流されんようにして今までのみんなとの関係を大切に守りたいんです。私にたくさんの子が自分の一番つらかった部分だった部落に生まれたということを書いてくれたけど、私は絶対にその子たちを裏切ることがないように、その子やが西日に照らされて苦しむようなことがあったら、さっと日陰をつくれるような人に私はなりたくないなあと思います。

中山（女）私も圓藤さんや井上さんの意見に付け足すんだけど、やっぱり始めにナインの資料をもらったときに思ったことは、何か難しいということが一番最初に思って、2回目、3回目と読んでいくうちに、段々いろんな考えが生まれてきたし、クラスでも意見の違う人がたくさんいて、話し合いも盛り上がっているんだけど、どうしても私は考えが変えれんというか、こだわっていたところがあるんだけど、今までの部落問題学習で築き上げてきたクラスの信頼関係と平行して考えていくと、ナインの奥に流れているものがよくわかってきたんです。やっぱりこの資料「ナイン」だけで考えていったら、今のような発表とか私の発表とかはなかったと思います。そして、みんなが心をつ一つにして板野中学校全員で部落問題について学んできたからいろんなことが考えられて、こうやって発表ができるんだと思います。

楠本（女）このナインとこのクラスの関係は似ているところがあると思います。私も前にみんなを信頼して自分の一番つらい部分を打ち明けたんだけど、周りの子が支えてくれたときはうれしかったです。はじめは言おうかどうか迷ったけど、みんなが支えてくれたので言ってよかったと思います。

大森（女）3年B組とナインはもうそのまま同じだと思います。自分のことを告白してその子がそのままではなくみんなが支えてその子の陰になっているから、このクラス全員がみんな一人一人の陰に入っているんだと思います。

廣瀬（男）このナインと3年B組はやっぱり同じだと思います。この「ナイン」の資料と部落問題学習の資料も根本は同じではないかと思いました。そして、高校に行って困難にぶつかることがあっても、僕は今まで僕を支えてくれた人とか、3年B組のみんなのことを思い出して、自分で自分自身を励ましながら頑張っていくと思います。

T12：英夫の気持ちや英夫の姿に我々3年B組というつながりを重ねて、みんないろいろな思いを語ってくれた。英夫の思いを今一度かみしめてみたい。最後のところで英夫が「自分たちは日陰なぞありえないところにちゃんと日陰をつくった。このナインにはできないことはないんだ。そんな気持ちでいっぱいでした。その気持ちは今でもどこかに残っていると思います。だから……」。〔板書⑥〕この「だから……」の後に飲み込んだ言いたかった思い、この英夫の思いに寄せてみんなの思いを語り合ってほしいと思います。

漆原（男）やっぱり英夫は今も、ナインのみんなの心は一つになっていることを望んでいるんだと思います。

村山（男）このナインにはできないことはないんだという強い気持ちがあったんだと思います。それで僕もこの富田中学校へ来る授業の前に、このクラスのみんなにはできないことはないんだと思って、みんなを信じて授業にきて実際にこの授業をしたら、やっぱりすごいなあって思いました。それで英夫の思いはやっぱりこのナインの関係を絶対になくしていきたくないという気持ちと、ナインを信じていた自分の気持ちを常雄や正太郎や他のナインも同じように思っていると思って、頑張り続けるもとなっていたんだと思います。

永峰（女）新道少年野球団のキャプテンとして活躍してきた正太郎が、他のナインたちの気持ちを打ち破り常雄や英夫たちを傷つけたけど、今でも優しい気持ちは正太郎の心の中にあると思うから英夫たちは憎めなかったと思います。

土内（女）陰をつくった正太郎が英夫の苦しみを自分の苦しみとして背負ったように、ナインだから、ナインとしてのかけがえのない仲間だから、その心はまだ正太郎の心の中に残っているという思いを込めていると思います。

太田（女）ナインみんなが集まれば陰のないところでも陰をつくれる。そしてできないことはないんだという気持ちが今の正太郎に少しでも残っていたら、自分のやっていることがみんなに迷惑をかけているかに気付いてくれるという自信と信頼が英夫にあったと思います。

T13：自信と信頼ということですね。

斎藤（女）私が3年B組のみんなを大切に思っているように、英夫も正太郎のことを大切な人と思っていると思います。

松本（男）僕はここでは正太郎を信じているかいけないかだと思います。正太郎を信じていたから、さっきから僕が何回も言ったことだけど、英夫は正太郎を警察に訴えることができなかつたし、英夫に感謝までするという思いがでてくるんだと思います。

井上（女）英夫というのは、自分には正太郎を信じることしかないんだと思っていたと思います。だから正太郎が心を入れ替えて帰るまで、その正太郎がつくった穴を埋めることしか自分にはできないんだと思ったんだと思います。そして、やっぱり自分たちナインには何もできないことはないと思っていたから、変わっていった新道を自分たちなら昔の温かい関係の元の新道に変えられると思ったんだと思います。もし、新道の街自体が大きく変わってしまっても、昔の人間と人間との絆があった新道のよさをもって、自分たちは頑張っていくことができるという自信があったんだと思います。そして、今私は英夫みたいに、絶対に切れることのないみんなとの絆を大切にしたいし、自分たちには何もできないことはないと思っているから、たくさんの人が板野という町をどう思っているかは知らないけれど、私は3年B組のみんなとなら絶対に、板野町に対する偏見の目とかを変えていけると私は今自信を持っています。

中山（女）私も井上さんと同じような意見なんですけど、この3年B組のクラスの中に私がいてよかったと思います。みんなの前だったらいろんなことを発表できるし、そしてもし友だちとかがその友だちのつらいことを告白してくれたときでも、このクラスのみんなだったら一人にしないですぐに手を挙げて支えてくれるし、そんな仲間とならどんなことでもできると思います。そして、私もみんなとともにこの板野町をどんなふう考えている人がいるかわからないけど、そんな偏見の目を一生懸命頑張って変えていきたいと思います。

松本（男）このクラスは僕の一番言いたいことがはっきり言えたクラスであり、やっぱり心が通

じ合ったクラスであるから、この思いを忘れないで将来この思いを生かして、差別とかにも対抗して頑張っていきたいと思います。

T14：みんなの思いがいっぱいまった授業になってきた。そのことが嬉しい。そして、本当時間がわずかになってきたんですけど、前の時間の話し合い。またこの時間の話し合い。いっぱい言いたいことがあるだろうけど、あとわずかな時間をもらってみんなの中にある思いを最後出し合って、この時間を閉じたいと思います。

村山（男）この「ナイン」の学習ももとなるものは部落問題学習だと思います。この資料も国語として考えれば難しいことがいっぱいあって、あまり考えが出てこなかったと思うけど、今まで取り組んできた部落問題学習を土台として考えてみたら、どんどん考えが深まってくるし、出てきた意見についても自分でもっともっと考えていかなければという思いがあって、実際に考えられるようになったのは、部落問題の学習があったからだと思うんです。前の時間に道德の学習と部落問題の学習は違うという話があったけど、やっぱり道德の学習をしていく上でも、今までの部落問題学習の積み上げがあったから考えることができたし、僕たちは部落問題学習の方を先に重点的に勉強していたから、ここまで意見が言えるようになって、この「ナイン」の資料とかもより深く考えられるようになったから、部落問題の学習は人間の生き方を考えていく基本としてとても大切なものだと思います。また、ここまで周りのみんなを信頼できるようになってきて、支え合う仲間ができてみんなとの絆がどんどん深まってきたのは、やっぱり部落問題学習があったからだと思うんです。僕には部落問題学習を通してできた仲間がいたから、今の自分があるんであって、仲間がいなくて支えがなかったら今の自分はなかったと思います。

井上（男）今日の授業はみんなに熱いものがこみ上げてきたと思います。こんなに発表するんだから、みんな一生懸命になっているんだと思います。そして前を見てみると「人間としての生き方を考える道德教育」と書いてあるけど、やっぱり村山君の言うように人間としての生き方を考えていく上では、部落問題学習も道德の学習も変わらないんだと思います。

圓藤（女）この「ナイン」の資料を最初に読んだときは、まさかこの「ナイン」が部落問題学習と重なっているとは思わなかったけど、いざそうなって考えてみたらそうだなあと納得できて、今この場に自分が居れたことをとてもうれしく思います。それで、このみんなとずっとこれからも頑張っていきたいし、ナインは正太郎のせいでくずれていくような感じになったけど、私たちは絶対正太郎みたいな人を出さずにそのままずっと崩れないでいきたいです。

土内（女）今日は私の友だちが初めて手を挙げてくれてすごく嬉しかったです。友だちも嬉しかったと思うけど、その嬉しさが自分のことのように思えてきて、何か本当に嬉しかったです。それと、今日手を挙げられなかった人も、自分はできないと信じないで、自分はできるんだと信じたら絶対できると思うから頑張ってほしいです。

T15：ありがとう。時間がきてしまいました。

生徒：時間延長できんですか。ほなって手を挙げとる子、ようけおるし……。

T16：時間もらいます。

姫田（男）今日僕は一回も発表してないけど、さっきからずっと考えていたんだけど、「ナイン」を最初、授業する前は部落問題学習とは全然関係ないと思っていたけど、「ナイン」を勉強していくうちにやっぱり部落問題学習と結び付きがあるんだと思いました。だからこそ何かこんなに熱いものがこみ上げてくるんだと思いました。

川田（女）みんな信頼とかいっぱい言ってくれたけど、私はこの前ちょっと発表できなかつたりして、みんなを裏切ろうとしていました。そのことを先生に言ったら、それは今まで信頼してくれた友だちを殺すことになってしまうと言われてすごくそれから悩みました。だけどそんな私でも、みんながいてくれたから、これからまた燃えられるようになるかなと思いました。

中山（女）私たちもやっぱり川田さんのような人がいて友だちがいて、川田さんのように発表してくれる友だちがいるから、これからは頑張ろうと思うし今頑張れているんだと思います。

井上（女）この資料を読んでやっぱり最初に思ったことは、経済的には豊かになってきた日本だけど、どんどん人間の心というのは貧しくなりつつあるんちがうかなあと思いました。この正太郎のように社会の流れに流されて変わっていく人ってたくさんいると思うんです。だけど私たち3年B組だけは絶対に変わらないままで今の絆を大切にしたいなあと思いました。それでこの勉強をされていて英夫という人は、部落問題を考えていく上でも、人間の悲しみとか部落差別とかの悲しみがすごくわかる人だと思います。だから私たちも英夫のようにずっと仲間を信頼して生きたいし、そして今の3年B組のみんなだけでなく、たくさんの人と『かげ』をつくり合って、この絶対おかしい差別をなくしていかなければならないと思いました。それに今日みんなすごく輝いていたと思います。

T17：（板書⑦「3年B組の絆」）終わります。

《授業が終わると同時に会場からの大拍手、生徒が退場する時にも再び大拍手が起こる》



第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業（於 徳島市富田中学校体育館）